令和6年度　第1回　静岡市総合教育会議　会議録
（委員等の発言の要点を箇条書きでまとめています）

日時：令和6年5月30日（木）
午後2時00分～午後4時00分
場所：静岡市役所静岡庁舎
新館8階　市長公室

1 開 会

【難波市長挨拶】
・乳幼児から高齢者まで全世代を対象にした静岡市教育大綱を策定する。
・総合的な施策の大綱である。
・前回の会議では、主に基本理念、基本方針についてご意見をいただいた。
・今回は重点的な取組という具体的に何をやっていくかを協議していきたい。
・教育大綱はただ題目が並んでいるだけではあってはならない。実際に社会のためになるように、大綱で示されている理念に基づいて、政策・施策の展開や教育現場で色々な取組がされていく必要がある。こういう方向で取り組んでいかなければならないと思えるような教育大綱にしていきたい。
・本日はゲストをお招きし、学校教育とは少し違う視点から講演いただく。静岡を拠点にスタートアップをはじめとした起業支援を行う EXPACT 株式会社の代表取締役 髙地 耕平様、兄弟でそれぞれ起業して会社を経営しておられる株式会社ジョハリの代表取締役 長島 寛人様、株式会社 SIROIRO の代表取締役 長島 悠人様にお越しいただいた。
・静岡市でデジタルなどの成長分野に限らず人材の育成あるいは起業家が生まれるためには何は必要なのかなどについて講演をしていただく予定である。
・お三方には昨年度、中学生及び高校生への講演をお願いした。本日は、そのときの反応についても示していただける。
・教育大綱で、「新たな時代で活躍する多様な才能・能力を伸ばす」ということを基本方針の1つに掲げようとしているため参考になると思う。

【赤堀教育長挨拶】
・総合教育会議の議論を経て教育大綱が策定されることによって、すべての世代、ライフステージを通しての学びが位置付けられてくると考えている。
・多様性を大切にすべての人々がそれぞれの幸せを実現するその拠り所にしたい。
・すでに小中高を対象にした教育委員会における第3期教育振興基本計画が策定されているが、教育大綱が策定されることによって、さらにその計画が意味のあるものになるのではないかと期待している。本日は建設的な議論ができたらと思う。

【黒川教育委員紹介】
・先月より教育委員に就任した。
・普段は不登校の中高生の居場所づくりや、当事者の方及び保護者の方の相談にのる事業を行っている。もともと引きこもりの支援を長くやってきた中で、幼い頃から色々な課題を抱えて大人になり、その先に困難を抱える大人たちをたくさん見てきたため、できるだけ早い段階で困っている子どもたちやそのご家族を支援したいと思い、このような事業を立ち上げた。
・教育委員として何ができるか手探り状態ではあるが、4年間よろしくお願いします。

2 講 演

「夢中になれる力を育む～アントレプレナーシップ教育の可能性～」】

【説明】
（司会）
・静岡市出身の髙地様、長島様は、首都圏や静岡県内で事業を展開し、昨年度から本市が実施する市内中学校・高等学校にスタートアップ起業家を派遣し講座を実施する取り組みに参画いただいている。
・お三方とも、起業家自らの進路やキャリア選択にまつわる経験を学生に共有することで、将来的に、起業というキャリア選択を与えるとともに、既存のやり方にとらわれない、新たな事業を生み出すことで課題を解決していく、そういった人材を静岡市で育てていきたいという強い思いを持っている。

（髙地様）
・スタートアップ起業家による出前講座では、起業するためのノウハウ・知識を伝えたいのではなく、アントレプレナーシップという、どういう起業家がどういう精神・思い・行動特性を持っているかといったマインドセットを伝えたいと思い、本講座に携わらせていただいている。
・アントレプレナーシップは、文部科学省の定義でも、自ら枠を超えて行動を起こし新たな価値を見出していく精神のことだとされている。かみ砕いていうと、課題を見つけてチャレンジしたり、他者と協働したりして、まだ世の中にない解決策を見つけるということ。単に起業する、ビジネスをやるとは異なる。出前講座の冒頭でも、中高生に向けて自分の軸を持って考えましょうと伝えている。
・自分でやりたいことを見つけて、そこに夢中になって取り組んでいくことが大事だと、起業家の仲間と話し合って共通の価値観としてあったため、それを講座の中で伝えている。
・また、中高生に併せて伝えたいこととしては地域愛。なぜ静岡に戻ってきたか、東京にいながらどのように静岡に貢献していきたいか、しているかについても中高生に発信していきたい。
・アントレプレナーシップは全員起業しないといけないと一見捉えられがちだが、違うと思っている。

昨年度出前講座に伺った学校の先生方も、ある意味アントレプレナーシップを持っていると思った。生徒に、起業家や新しい価値観等について教えてほしいという思いがひしひしと伝わってきた。その生徒たちとも活発な意見交換ができたと思う。

・自分たちが伝えたいアントレプレナーシップとは、公務員、教員、学生、起業家など全員が持つべきものであり、それぞれの職場やおかれた環境の中で色々なチャレンジができると思っている。起業することがえらいのではなく、それぞれ色々な立場でアントレプレナーシップを持って挑戦していくことが大事。起業が正しい、起業しなければならないということは、自分たちの価値観やメッセージとも違っている。

・昨年度実施した出前講座についての話を長島兄弟からしていただく。

（長島 寛人様）

・出前講座で受けた反応として嬉しかったのは、起業家は普通のことなのだと受け止めてくれたこと。良い大学を卒業して、大きな会社に就職して出世するというルートもあるが、今はそれが一般的ではないということをもっと早い段階から中高生に伝えたい。

・出前講座ではまだぴんときてない生徒も多かったと思うが、好きなことを仕事にして良い時代であり、それがない人は思考が停止していると思われて機械に代替されていくという話は刺さったのではないかと思う。

・自分が就職活動のときに聞いてはっとした話だが、高度成長で良い大学に入って良い会社に入ったら安泰という大きな物語の時代は終わって、自分はこの分野でこういう価値を世の中に出していける、そしてそこから対価を得ていけるという小さな物語をそれぞれが作っていく時代だという話は中高生にも刺さっていたと思う。

・今の時代を大学入試共通テストで例えると、来年から理科と社会が廃止され家庭科400点の配点になるという常に受験科目が変わる状況。これからどんなテクノロジーが来るのか分からない中で、1年間、2年間で本気で勉強し直す、まさにリスキリングをして世の中に食らいついていけるか。この力こそが大事なのではないかと思っている。

・来年から家庭科400点の配点だと言われても、9割とれるようになる自信があるのではないかと生徒たちに尋ねたときに、生徒たちから、本気でやればできるかもしれないと回答があり、頼もしいと思った。

・世の中で求められるものは常に変わる。時代の変化に先駆け、何の力が求めらているか、どの科目が勉強科目なのかを大人が提示できたら良いのではないかと思う。

（長島 悠人様）

・キャリア選択において、色々な選択肢があるということを小中高校生に伝えていきたい。

・自身も、高校の卒業生が来てくれるイベントに参加し、自ら起業し会社経営している人もいれば、一流企業で成績を残している人もいて、そこで色々な形のかっこいい大人を知ることができた。

・自分が中学生のときはこんなに色々な選択肢があることを知らなかった。

・出前講座でも、起業家ってそういうことなのか、自分が知っている職業しか選択肢になかったけれど、好きなことが仕事になるのかと新たな発見として受け止められていた。
・自分の好きなことが仕事になる時代で、好きなことを伸ばしていって良いと話したときは、それでいいのだと、生徒たちが相当うなずいていた。
・学校での学びの中に仕事でも活きてくることがもっと多くあったはず。1つ1つの学びがどう将来に繋がっていくかを小中高校生に伝えていきたい。
・DX や AI などをもっと意欲的に活用することも併せて子どもたちに伝えていきたい。

（髙地様）
・自ら起業する方、大企業の大きな予算で新規事業を行う方、どちらもアントレプレナーだと思っている。出前講座等を通して、多様な選択肢を子どもたちに与えていきたい。
・例えば、同じ中学校の先輩が起業して頑張っているというような、身近なロールモデルとの出会いを創出していきたい。
・また、静岡を出ていく若者が多いことに課題を感じている。技術的にはリモートワークで仕事ができる時代になっている。そういった働き方の会社を静岡にどうやって増やしていけば良いのか、そこをスタートアップが担えるのであれば、さらにスタートアップを呼びこんだり、起業を促したりしていきたい。
・若者が夢中になれるようなキャリアを見つけたり、もしそれがないのであれば本人が起業する手助けをしたりしていきたい。
・今後も出前講座でこういった思いを伝えていきたい。

【意見交換】
（教育長）
・静岡市の教育について、目指す子どもたちの姿「たくましく　しなやかな　子どもたち」を念頭に置いて取り組んでいる。たくましく　しなやかというのは、常に夢と希望を持って自分の未来を切り開いていける、そんな子どもたちを育んでいきたいという私たちの思い。
・そのためにはキャリア教育は大事だと思っている。特に桜が丘高校については、スクールポリシーの中でもアントレプレナーシップを1つの大きな目標に掲げている。
・キャリア教育は各学校が工夫して行っており、それを教育委員会が支援しているところだが、皆さんが教育現場に入っていただいて様々課題も感じているのではないかと思っている。そのあたりを教えていただきたい。また、今の子どもたちについて感じたことをお話いただきたい。

（長島　寛人様）
・中学1年生に向けてクイズを盛り込んだ講演をしたときはとても盛り上がった。元気な印象。
・中学3年生に向けて講演をしたときは、するどい質問が出てきたりした。
・先生方から、自己肯定感の低い子どもたちが多いと聞いた。勉強やスポーツができないと、

どうせ自分は勉強やスポーツができないから、コミュニケーションが苦手だからと、自分に希望を見出せなくなってしまうのではないか。
・それぞれの好きを突き詰めた先に、簡単なことではないが、未来があるということは、真新しいメッセージとしてうつったのではないかと思う。

（長島 悠人様）
・自身が中学生のときは、何かを突き詰めている人に対してリスペクトを持っていない人が多かったように感じるが、出前講座で中学生に向けて、何かに対してディープな人はいるかと尋ねたときに数名名前があがり、リスペクトを受けている様子だった。良い変化だと思った。
・突き詰めていくことが将来につながる。何かを突き詰めていこう、そしてそれをリスペクトしていこうということを、今後より明確に発信できたら良いと思う。

（髙地様）
・出前講座を実施した学校の中でも、意見交換が活発にできたところと、そうでないところとまちまちであった。
・そこで何か意見を言うことが起業家の第一歩だと思っているため、今年度は講師側も工夫して実施していきたい。

（松村委員）
・若い人たちが若い人たちを育てようとする、まさにアントレーな取り組みだと思った。
・起業家なるものは、社会に利益をもたらすように起業しなさいということが根底にあるため、英語教育をどうするかということが大きな課題となる。
・教員の勉強の姿勢が大切。例えば DX など本当に分かっている人は少ないのではないか。
教科書を教えるのではなく、教科書を参考に自ら勉強し、付け加えたものを教える。時代の先端を読みながら。それでも進化ではなく変化でしかない。進化と変化を教員がどうとらえているか。
・子どもたちには刺激のある話。子どもたちも若い人からの話は素直に入りやすい。ただ、社会を知らない子どもたちが、それが社会のすべてだと思ってしまうことも考えられるため、そのあたりを踏まえての講演をお願いしたい。

（髙地様）
・今までは英語を勉強してから留学してみよう、外国の人と話してみようという流れであったと思うが、スタートアップ的な発想だとその逆で、先に外国の人と話してみて片言でも通じたり、通じなかったりという経験をした上で勉強する。
・チャット GPT 等を使いこなす世界線だと、外国の人とメールや通話ができてしまうため、知識のインプットも不要になってくる。
・それらを活用した上で自分は何ができるのか考えていく必要がある。技術を使って、英語が

話せないということを乗り越えたその先にどのような価値を見出すかということに、やるべきことがシフトしていると感じている。ツールを使って、できない言い訳をするのではなく、何ができるかを考える方が良いということを、出前講座でも子どもたちに伝えていきたい。

（長島 寛人様）
・1対 100 人の対面の講演も、ライブ配信に切り替えることで一気に1000人に見てもらうことも可能。静岡用に撮って、1 万回の再生ならば、1 万人に届いているということ。
・起業家たちも動画等で情報収集を行い、それをどう自分に落とし込んでいくかということをしている。
・教育現場での活用もできるのではないか。教員が動画を見た上でファシリテートしていく。子どもたちにどう思った、どう感じたと問いかけナビゲート側に徹する。ティーチングのところは広くテクノロジーを使っていくなどによって、いかに教員の負担なく起業家教育をしていけるかを考えていきたい。

（長島 悠人様）
・英語が話せる起業家と話せない起業家とでは見えている世界線がかなり違う。英語が話せる起業家だと市場規模が広がるため海外に向けたサービスや海外展開をどうするかを考えている。英語が話せない起業家はそもそもそういった選択肢がない。
・英語教育はより実践的であったらよかったと思う。
・起業家が大事にしていることは、いかにハックできるかということ。競合企業がどういうやり方をしているか、コピーしてトレースしてどう改善するかに注視している。戦略や意思決定、何をしているかということを、どうやったら学べるか、自分たちも諸先輩方から学んだ。

3 議 題

静岡市教育大綱の策定

【説明】
（企画課長）
・資料1～資料3により、「静岡市教育大綱の策定」について説明

【意見交換】
（松村委員）
・大綱の中で気になるのは、言葉。言葉はとても大切であり、市民が見たときに分かるかなという疑念を持っている。例えばリスキリングといったカタカナ言葉など。
・また、資料2に「基本方針1：確かな学力と幅広い知識と教養、豊かな人間性を高める」とあるが、「知識」と「教養」はどう違うか。「知識」と「教養」が同列になっているが、どのようにお考え

か。

（総合政策局長）
・「知識」と「教養」であるが、学びが上で色々なことを習得することがいわゆる知識、学び以外のことも含めて大きな意味で色々なことを習得することが教養との認識であった。

（松村委員）
・そういう説明があれば良いのではないか。学んで知識を蓄え、それが知恵に変わる。知恵が生活の中に生きてきたときにはじめて教養になる。知っているから教養が高いというのは違う。使い方が分からないととんでもない間違いが起きる。知識はベースになるため、一生懸命勉強して知識を蓄える。それが生きていく中で知恵に変わる。知識を知恵に変えるための能力をどう育てるか。
・カタカナの言葉は極力なくした方が良いと思う。皆が使っているから当たり前ではない。やむを得ず使う場合は、注釈を入れるなど市民が分かりやすいように。
・市長が最初にお話しになった、言わばゆりかごから墓場までの教育をやろうという考え方はとても大切。ぜひ皆さんでやりましょう。

（市長）
・分かりやすいようにということに対してはかなり気を遣っている。リカレントとリスキリングの違いについては注釈をつけた。それでもまだまだ。
・言葉の定義についてだが、何となく分かったようで使っているところが多い。
伝えるつもりが全然伝わっていないということが多々ある。伝わらないと何にもならない。言葉遣いを良く気を付けていきたい。

（総合政策局長）
・今いただいたご指摘は市長からも受けており、注釈を入れたり、枕詞や形容詞で補ったりしているところだが、まだまだ分かりにくいところがあるため、表現等見直しをさせていただく。

（井上委員）
・細かい言い回しについては個別に事務局に伝えたいと思うが、特に気になった点を言葉の表現含めてお伝えできたたらと思う。
・資料2の基本方針1の趣旨に、「保護者や身近な大人に依存し」とあるが、子どもは大人に頼らなくてはならない存在ではあるものの、依存という表現は適切であるか。保護者や身近な大人への基本的信頼関係を獲得しながら、他者から受け入れられて自己肯定感を高めていくという趣旨の文面であると思うが、依存という表現については再考いただきたい。
・次の段落の、「豊かな「遊びと体験」を通じて」が「運動能力を高めていく」にかかっているが、運動能力と並列して、創造力や好奇心、道徳性、社会性、非認知能力も高まっていく。言いた

いこととしては、「遊びと体験」を通じて色々な能力を育んでいくということだと思うため、表現の仕方をご検討いただきたい。
・の基本方針5について、「誰一人取り残されず」が何に対してかが書かれていない。解釈としては、誰一人取り残されない学びの保障ということではないか。表現を市民に分かりやすいように変更いただきたい。
・今後パブリックコメントを行っていくことで市民の皆様に広く周知されていくと思うが、子ども家庭庁からも子どもの意見を尊重するよう通達が出ている。学校教育に関わる教職員や子どもたちがどう思うかを聞く機会があっても良いのではないか。

（市長）
・豊かな「遊びと体験」を通じて、創造性や好奇心、想像力などを養うとともに、運動能力を高めていくという意図。
・松村委員からもお話があったが、言葉は丁寧に。読む人によって解釈が違ってしまわないように気を付ける。

（総合政策局長）
・教育大綱はすべての市民が対象であるため、誰が読んでも共通の理解を得られるように表現を再考する。
・また、パブリックコメントとは別に教職員や子どもたちの意見を聴取することについては、教育委員会と相談し実施していきたい。教育委員会はいかがか。

（教育長）
・井上委員がおっしゃった子どもたちの思いや考えを聞くということは大切だと思う。手段については、総合政策局と調整をしたいと思う。

（松村委員）
・英語は主語と動詞はくっついているが、日本語は主語と動詞の間に色々な修飾語が入ってしまう。先に結論を言うと良い。主語・動詞あるいは主語・述語を先に述べ、そのあと説明をもってくる形が良いのではないか。

（佐野委員）
・学校教育と生涯学習を教育大綱の中で同時に表現していくことの難しさを感じている。資料2の基本方針4については、生涯学習の要素が強いと思うが、現在の内容だと、キャリアアップやリスキリングなどビジネスをしていく上でのというニュアンスが強いように思う。
・例えば、俳句を学ぶことなどにより、豊かな人生を送るというような生涯学習の側面も取り入れてはどうか。個人が豊かさを感じる、幸せを感じるというニュアンスが強くても良いのではないかと思う。

・基本方針3についても、若干、生涯学習の要素が入っていると思うが、重点的な取組を見ると学校教育の側面が強く出ている。生涯学習をもう少し絡めることはできないか。
・基本方針5で真っ先に思いついたものは奨学金制度。教育の機会を保障すると考えると奨学金という制度は大きな手法であるため、入れると良いのでは。

（総合政策局長）
・基本方針3および4については、生涯学習の要素をさらに含められるか検討する。

（市長）
・教育大綱には入れずとも、パブリックコメントを実施するときに分かりやすいように重点的な取組（取組例）を示すこと。その中で入れるなど色々方法はある。

（黒川委員）
・教育大綱は全国的に似通ったものになるかと思うが、静岡市ならではとは何だろうか。
・静岡市の人口が減少していく中で、資料2の基本方針3の趣旨に、「これからの日本、世界で活躍する人材の輩出に向け」とあるが、それと同時に静岡市に戻るという選択を支援することも大事だと考える。
・静岡市でどのように活躍できるかが見通せるから戻ってくる若者も多いのではないか。静岡市で活躍できる人材をどのように育てていくかを盛り込んでも良いのではないか。
・子どもたちを中心に考えがちだが、高齢化が進んでいく中で、高齢者をはじめ、色々な学びを蓄積してきて教養を持った方々が、どのようにして次の世代にそれを伝えていくかという部分をどこかに入れても良いのではないか。生涯にわたって学ぶだけでなく、学んだことをどのように循環させていくかという視点があると良い。何年にも渡って学び続けることは大事だが、学んだことを次の世代にどのようにつないでいくかも教育の大事な側面だと思う。
・基本方針5の趣旨では、貧困や虐待が具体的に挙げられている一方で、障がいのある方々への支援については触れられていない。インクルーシブ教育が推進されている中で合理的配慮などといった文言をあえて入れていない理由はあるのか。

（市長）
・教育大綱のボリュームや形式等は各市町でまちまちである。
・地域で活躍する人材については、基本理念には、地域で貢献していただくという考え方が含められている一方で、基本方針の中ではあまり盛り込まれていないため、ご指摘のとおりだと思う。
・障がいのある方々への支援については、基本方針5の趣旨の中の「年齢や発達の程度に応じた」に含めているつもりであるが、読み取りにくいため見直しが必要。

（総合政策局長）

・地域で活躍する人材については、静岡市をスタートアップ起業家が活躍できる場にすることも1つの方法ではないか。
・学んだことを次世代に伝えていくという観点に関しては、基本理念に盛り込んでいる「地域の教育力」がまさに地域全体でという観点であるが、基本方針の中でも読み取れるようにしたい。
・基本方針5の障がいのある方々への支援については、市長の発言のとおり。

（永松委員）
・基本理念の説明部分の「地域や社会全体の「大きな知と力」」について、「大きな力」という捉え方をすると、強い権力のような印象を受ける方がいるのではないか。「大きな知」としたときにも、曖昧で色々な解釈が出てきてしまう言葉ではないかと感じた。
・「大きな知と力」は、市政変革研究会で出てきた言葉ではないかと思うが、その中ではきちんと、社会の大きな力と世界の大きな新しい知（知性、知恵、知能）を活かして社会課題の解決や新たな静岡市の価値・魅力の創造に繋げる共創の仕組みづくりを進めていくことが不可欠だと明確な説明があった。短く端的に言いたかったのだと意図を読み取ることはできたが、もう少し丁寧に説明いただけたらと思う。
・システムを構築するという言葉が、基本理念の説明部分をはじめ何か所かで使用されているが、システムの構築というとプログラミングの設定など機械的で柔軟性がない印象を受ける。本来であれば、仕組みづくり、土台づくり、環境づくりといった意味だと思うため、システムの構築ではなく、もう少し優しい言い方にした方は良いのではないか。
・資料3の3ページ「基本方針のイメージ図」について、とても悩まれて作成されたのだと伝わってきた。この図を踏まえて、基本方針1から順に読んでいかないと理解が難しいと思う。本当は、基本方針の何番から読むべきか。基本方針1の小さなお子さんの部分から読み始めたときに感じてしまうのは基本方針5の部分。豊かで幸せな環境で育ててあげたいのはもちろんだが、逆の状況を考えたときに、それが基本方針5まで出てこない。その違和感を解消できないか。

（市長）
・基本理念の説明部分の「大きな知と力」についてより正確に言うと、社会の大きな力というのは、一人ひとりの力は小さいがそれが集まるとより大きな力になるということを意味している。そこまで言葉を補わないと伝わらない。
・システムの構築はおっしゃるとおり。
・資料3の3ページ基本方針のイメージ図のことだが、本当は「基本方針5：誰一人取り残されず、全ての人の可能性を引き出す」が最初なのかもしれない。それが大前提にあって全体にかかる。もう1回考えてみたいと思う。

（総合政策局長）

・基本方針1から6の順番はとても悩んだ。最初に基本方針5をもってきてから、そこから時間軸にもっていく方が良いのか。すべてが基本方針5に包含されていると捉えての案である。今一度検討を行う。

（井上委員）
・普段、様々な理由で生きづらさを感じている高校生と接しているため、基本方針5のところは特に力を入れて取り組んでいきたいと思っている。具体的な取組として、サポートルームの設置が取り上げられているが、サポートルームは不登校にならないためのもの。不登校の数が増えてきている状況であるため、今不登校になっている子どもたちに関しては、学びの多様化学校の議論をおそらく進めていくことになると思う。先週たまたま岐阜県の中学校の校長先生とお話する機会があった。丁寧に子どもたちが安全安心に過ごせる学校づくりをしており、全国から視察が相次いでいると伺ったが、今後こういった議論が必要になると思う。

（佐野委員）
・先程の静岡市ならではの取り組みという話を聞いて、思いついたものだと、しずおか学。しずまえや防災など静岡市ならではの教材を各学校が選んで取り入れている。地域のことをよく知る学びという項目を重点的な取組に入れても良いのではないか。教材は、我々も読むと気づかされることがある内容にできあがっているため、入れていただいても良いのでは。
・アントレプレナーというと、どうしても感じてしまうのは、起業家になる、会社を作るということ。だが、子どもたちに教えたいのは起業家精神である。興味を持つことや心構えなどそういったことを重点的に教えてあげていけたら良い。

（永松委員）
・アントレプレナーについてだが、自己肯定感につきるのではないかと思う。子どもだけでなく、先生方など大人も自己肯定感を持てていないのではないかと最近感じることがある。アントレプレナーと聞くと、起業しなければならない、捉えようによっては、県外等に行って活躍することがアントレプレナーだというような印象を持たれがちだと思う。生活していく中でいかに自分が社会の一人として肯定感を持って生きられるかの教育をしていくべきではないか。

（松村委員）
・中高向けのアントレプレナーシップ教育の出前講座は、捉え方によっては、起業家だけを育てるように子どもたちは受け取ってしまわないかと疑念を持っている。子どもたちが将来を考えるきっかけになる大事な取り組みであるため、講師との事前の意識合わせが必要。
・親の経済状況の問題や不登校の問題など、子どもに責任のないところで子どもに責任が被さってしまうことがある。そこにどう手を尽くすか。どう手だてをうつか。目に見えないとても大切な仕事がある。100％うまくはいかない。でも努力をすることはとても大切である。そのことを皆が認識しなければならない。

（市長）

・教育大綱が必要な理由でもあるが、市長部局と教育委員会との縦割りをやめ、学校教育だけでなく家庭まで入ったところを一緒にやっていかなければ問題の解決にならない。

・家庭の貧困対策や自己肯定感を持てるような環境づくりなどが大切になってくる。ただ、まだまだ子どもの貧困対策に手がついておらず、ボランティアで非常に思いのある人の努力に頼っているようなところがある。

・市全体として土台、土俵、仕組みが上手くできていない。それは今大きな課題として早急に次の取り組みの検討をしている。非常に大切な視点だと思う。

・中高向けのアントレプレナーシップ教育の出前講座の講師にお願いしたことは、子どもたちは、YouTuber は知っていても、起業家やスタートアップは見たことがない、そういうものがあることすら知らない。皆が皆、起業家になれる訳でも、ならなければいけないものではないが、多様な生き方があることに気づいてもらえたら良いと思っている。

（黒川委員）

・家庭に入りこむかどうかについて、資料2の基本方針6の趣旨に「教育や保育現場においては、そこで生じる負担を教師など個人の努力だけで解決させるのではなく」という文言があるが、学校現場は本当に大変だと思う。

・先生一人ひとりがやらなければならない業務が多く、子どもたちが抱える課題も様々であるため、登校している子どもたちだけで精一杯というのもよく分かる。そのような状況でも先生の中には、時間を惜しんで登校できなかった子どもに向けても動いてくださる方もいる。

・どの先生が担任になるかで差が出てしまう。それぞれ違う人間なので差が出て当然だとは思うが、その差をどういう風に埋めてあげられるかは、学校のシステムとして変えていけるかが重要。

・基本方針2の趣旨にあるように、今まで同じ教育をしてきた。先生が言ったことを皆が学んでそれをできたか、できないかというような教育が長く続いてきた。それを子ども一人ひとりの個性を重視しながら、それをどう伸ばすかという教育に変わろうとしていると思うが、システム自体がなかなか変わらないことで、結局うまくいかないということが続いているのではないかと思う。先生方だけに頼らず、先生一人ひとりが最大のパフォーマンスができるシステムをどのように変えていくのか。

・また、先生方と保護者の付き合い方が変わってきており、昔は先生の言うことが絶対であったが今は違う。発言1つとっても、捉え方によっては問題になり、言いたいことが言いづらくなってしまうこともある。教師を目指す大学生のときから保護者対応の仕方を教えてあげる必要があるのではないか。新卒の子が1年目からいきなり担任を持つ時代であり、そういう子が失言をして親を怒らせてしまうのは当たり前だと思う。企業ではそれを上司が代わりに解決してそこで学ばせるのが一般的だと思うが、学校現場では基本的に先生1人で子どもたちを見ており、1人で色々なものを抱えているため、それが長く続くと学校に行くことがつら

くなってしまう先生が出てくるのは当然のことだと思う。先生方一人ひとりの力量にゆだねるのではなく、システムとして支え合うことが学校の中で必要ではないかと思う。

（教育長）
・教育現場の先生一人ひとりの努力では対応できないところまできている。
・学校のシステムを変えていくために、今年度は、教育委員会と市長部局が一緒になって変えていく取り組みを始めたところ。しっかりと進めていきたい。

（市長）
・システムでいうと、教科担任制の導入や複数担任制の検討などを始めている。ただ、モデル校で実施しうまくいけば横展開をしていくという流れでは遅い。システムを作るというのであれば、強引は良くないが、統一してスピードを持ってやっていく必要がある。教師一人ひとりの努力にゆだねることが多すぎる。

（教育長）
・教育大綱をすべての市民の意識改革に繋げていきたいと思う。
・教育に携わる私たちであったり、教育現場の先生方であったり、それだけでなく子どもたちや保護者、そして広く市民の意識を変えて、静岡市の学び、静岡市の幸福を築き上げる大綱にしたいと思う。

4 閉 会

（事務局連絡）
・次回の総合教育会議は、パブリックコメント終了後の8月末頃を予定している。